

空間・社会・地理思想 第9号

■ 論文

- 泉谷 洋平 2-18
地名のない地理学
- 保本 野夢 19-53
「古都」京都と天皇制の可視化

■ 翻訳

- フィリップ・クラング (森 正人 訳) 54-71
文化論的転回と経済地理学の再構成
- アラン・スコット (本田 浩邦, 鈴木 秀男 訳) 72-82
グローバリゼーションと都市地域の出現
- アン・マークセン, クレリオ・カンポリナ・ディニス
(本田 浩邦, 鈴木 秀男 訳) 83-101
ラテンアメリカにおける地域間競争力格差 —機会と制約—
- ジェームス・S・ダンカン, ナンシー・G・ダンカン
(北條 大成 訳) 102-125
景観保存におけるポリティクスの審美化
- クリスティーヌ・シバロン (遠城 明雄 訳) 126-147
イギリスのポストモダンの思考, あるいはより良き思考の探究
- アラン・ブレッド (西部 均 訳) 148-167
歴史的にコンティンジェントな過程としての場所
—構造化と場所生成の時間地理学—

地名のない地理学

泉谷 洋平*

Yohei Izumitani
A Geography without Geographical Names

これって地理学？ そりゃそうさ！ だって、地理学が線を引いたり読み解いたりすることじゃなくて一体何だっていうんだい？¹⁾

X：2003年に地理学評論で大平氏、成瀬氏、中島氏の三者で「固有名としての地名」を巡って論争²⁾があったけど、泉谷氏はポストモダン-実在論論争の論文³⁾で、あの論争には全く言及してなかったよね。

Y：確かに。

X：泉谷氏の論文の元になった学会発表のサブ・タイトル、覚える？ 「とある論争と…」。

Y：「その地図」。

X：そうそう。私としては、論争の地図化がテーマなんだったら、地理学評論の論争に対しても何か一言欲しかったなあ。泉谷氏は、海外の論争の紹介を通じて、思弁的、理論的、哲学的な議論が、経験的調査研究優位の日本の人文地理学にとっても必要とされているってことを主張したかったわけでしょ。

Y：確かに「固有名としての地名」論争、特に大平氏の論考は彼自身書いていたように⁴⁾、とても抽象的な議論だったし、そういう意味では泉谷氏が触れていないのは不自然かもしれない。でも、まああの時点で泉谷氏が何か書いたとしても、表面的な評価しかできなかったんじゃない？

X：だとすると、泉谷氏は次の論文で、何か一言あの論争に関して積極的なコメントをしなきゃ。

Y：というと。

X：だから、海外の論争を持ってきて、哲学的・理論的な研究の意義の一つとして、それを通じて人文地理学者が自分たちの実践を反省する目を洗練させていった点を指摘してるわけでしょ、泉谷氏は。その点から評価すると、日本で起こった「固有名としての地名」論争はどうだったのか。人文地理学の自己反省につながりうるのかどうか。

Y：あの論争はそういうレベルにはまだ到達していないと思うし、だから、触れてなかっただけなんじゃないの。

X：もしそうなら、泉谷氏は今後、ポストモダン-実

* フリー geophil@venus.sannet.ne.jp
<http://www.mars.sannet.ne.jp/y-iz/>

在論争の論文で書いた結論と、「固有名としての地名」論争との間にあるギャップを、少しでも埋める仕事をしなきゃいけないんじゃないかな。

「固有名としての地名」論争を人文地理学全体の自己反省へと接続していくような、何か新しい視点を彼自身が考え出さないと。

Y：うーん…。そうかな。そう簡単に言い切れるかな。

X：違う？

Y：うーん。ギデンズ読解の論文⁹⁾にしても、「論争の地図」論文にしても、泉谷氏の書いてきたことは抽象的で思弁的な議論だし、そういう意味では、「固有名としての地名」論争の議論と共通する面もあるかもしれない。でもそれだけの理由で、もし泉谷氏自身が次に「固有名としての地名」論争について触れなければ、と考えているとしたら、なんていうかその、理論の自家撞着みたいなことにならないかな。

X：自家撞着？

Y：うーん、あまりいい表現じゃなかった。つまり、理論のための理論やってるっていう印象があまりにも強くなりすぎる気がするんだ。もし泉谷氏がいま「固有名としての地名」論争について語ったとしても、「そこに理論があるから言及しました」ってだけの表面的な議論になりかねない。

X：確かに、理論のための理論みたいなものって読むのしんどいよね。ギデンズ読解の論文も、正直あまりピンと来なかった。もう少し、フィールドワークの方へフィードバックできるようなのだと良かったんだけど。

Y：もっとフィールドワークとか実証的な研究とかに活かしやすい理論を、っていう意味？

X：うん。

Y：僕は、それは違うと思う。むしろ、ギデンズ読解の論文でその立場はすでに批判され否定された⁹⁾。そういう意味では、さっきと逆のことをいうけど、理論的な話はあくまで理論的な話に接続していかないと、意味がないと思うわ。

X：じゃあ、さっき言った理論のための理論っていうのはどういう意味？

Y：そうだね、舌足らずだった。もう少し詳しく説明しなきゃな。うーん、なんていうかその、たとえばフィールドワークに基づいた経験的な調査研究とか、彼自身選挙研究でやってたみたいなた統計分析とか、あるいは史料に基づいた歴史学的研究とか、まあ広い意味で何かしらのデータに乗かって実証的に進めていくような研究スタイルってあるよね。泉谷氏は、そういった広義の「実証的な研究」に対置されるものとして、「理論的研究」を理解していると僕は思うわけ。議論の力に頼って問題を解決していくような、思考実験的なスタイルの研究って言えばいいのかな。でも、この、「実証的研究と理論的研究」っていう分け方そのものは、実は全く理論的じゃない。むしろ、非常に経験的でナイーブだと思う。だから、単に大平氏の論文や後続の論争が何らかのデータに基づいて論じるってスタイルじゃない、思考実験的なスタイルだっていうだけで、泉谷氏が持論を接続しようとするなら、少し浅はかな気がする。そこでは、「理論と実証」っていう分け方そのものは温存されたまんまでしょ。本当はそれをこそ問わなきゃいけないのに。理論の自家撞着っていうのは、そういう意味で言ったんだ。「理論と実証」っていう自明視された区分を無批判に採用して、区分された一方である理論にだけ加担するっていうのは、やっぱり自家撞着的でしょう。

X：つまり、こういうことかなあ。同じように理論的な考察に見える「固有名としての地名」論争みたいな議論に安易に言及するんじゃないかって、まずその「理論と実証」っていう区別の仕方を吟味した方がいいんじゃない？ って。

Y: そうそう、そういうこと。

X: でも、現時点でそこまで問題を突き詰める必要あるのかな。「固有名としての地名」論争にしても、泉谷氏が紹介してた英語圏の論争にしても、ああいう哲学論議自体日本の人文地理学にはほとんどないんだから、もう少しああいう研究が増えてもいいんじゃないのかな。哲学的、理論的に刺激のある面白い研究が少ないっていうのは問題あると思う。

Y: 確かに、「面白い研究」が少ないって言うのは問題だよな。だって、面白い研究が少なければ、何が面白くて何が面白くないかの違いがわからない人が、査読者として、人文地理学の品質保証の鍵を握ることになっちゃうわけでしょ。

X: 査読者の問題は、もう少し複雑だと思うけど。私は、匿名性が単なる建前になってることが最大の問題だと思うな。

Y: 確かにね。匿名であることが一般性と客観性を保証するはずなのに、実際は少しも匿名じゃなかったりするような話は、現にいくつも耳にしている。話が逸れた。査読の話はまた別の機会にでも。とにかく、哲学的、理論的な研究が少ないことが問題だってさっき君は言ったけど、僕はそのことと、面白い研究が少ないことって、別の問題じゃないかと思うんだ。面白い研究が少ないからって哲学的、理論的な研究がもっと増えなきゃいけないってことにはならないでしょ。

X: 一般的にはそうだろうけど、日本の人文地理学に関しては、哲学的、社会理論的研究が少ないせいで、面白くない研究が増えてるっていう可能性はあると思う。それは、ここでいう「面白くない研究」が具体的にどうやってできていくかってことと関わっている。どういうことかっていうと、あらかじめ筋書きができていて、そこにデータを乗っけていくっていうパターンで、金太郎飴みたいに論文を生産するタイプの研究があるよね。「何々の地域的差異が～」とか、「場所のアイデン

ティティが社会的に構築されて～」とか、なんでもいいんだけど。データを拾ってくる場所さえ変えれば、いくらでも論文が書ける。で、議論の自身は読まなくても大体分かっちゃう。雛型にデータを当てはめて論文を書いたり発表の筋考えたりっていうプロセスの中で、雛型に合わないデータや、データに合わない雛型はばっさと切り捨てられていく。そこでいちいち深く考え込んでると論文書くことも発表することもできなくなるから。でも、実は本当に問題になっているのは、雛型に合わないデータや、データに合わない雛型の方なわけで、その矛盾そのものと向き合って考えるときって、どうしても根っこを掘り崩しかねないような哲学的思考になるでしょ。哲学の用語使ったり、いかにも哲学研究らしい文章書いたりするわけじゃないけど。

Y: うんうん。それで？

X: で、本来、良く出来た社会理論的、哲学的研究って、この「根っここの掘り崩し方」のお手本のよなものだと思うのね。哲学的思考っていうか、事実じゃなくて論理に頼って自分の根っこを掘り崩したり踏み固めたりするような議論って言えばいいのかな。日本の人文地理学にはそういうお手本があまりに少なすぎる。もちろん、理論的な研究とか哲学的な研究の世界にも、同じような金太郎飴的業績生産法はあるだろうし、そういうのに価値はないと思うけど。

Y: なるほどね、じゃあ、さっき言った「フィールドワークとか実証的な研究とかに活かしやすいような理論」ってのは…。

X: もちろん、データを乗っける雛形の方じゃなくて、思考のお手本としての理論ってこと。ちょっと言い方が悪かったわね。逆にいえば、特定の地域とかフィールドとかをもたない、抽象的な言葉で語られる研究の数が増えていって、それがまた、たとえば英語圏の一部みたいに、新しい雛形になるんだとしたら、そういう研究の数なんて増えなくていいと思う。まあ、日本に関して言えば、現

状ではそんなになるまで増えるとは思わないけど。

Y: でも、哲学や社会理論にそういう意義があるってことを認めるとするなら、泉谷氏の「論争の地図」論文は少し雛形になってしまうような危うさがあるともいえる。たとえば、彼がこのネタを学会で口頭発表したとき、座長が「いままでの泉谷氏の発表の中で一番分かりやすい」って冷やかしていた。でも、この文脈では、分かりやすいっていうのは美德ではあり得ないわけでしょ。あと、大学院のゼミで発表した時にも、ある先生に「大変勉強になりました」って言われたらしい。だから、彼はやっぱり一度引き返して、「理論／実証」の区別そのものを徹底的に考え直さなきゃいけないんじゃないかな。簡単に分かっちゃうもんじゃなくて、簡単には分からないものを書かなきゃいけないと思う。

X: そうかなあ。考えすぎのような気もするけど。彼の発表を聴いて分かりやすいって思った人たちがいたとして、その人たちがその後、彼のアイデアをすぐさま雛形に利用するっていう方が、あんまり現実的じゃない気がするけど。それこそ、泉谷氏の論文にもあったけど、「理論／実証」っていう区別の妥当性とか、そういうテーマは、彼以外の人が指摘して、議論が成立して、そこで始めて問題にされるんであって、泉谷氏の頭の中で泉谷氏にとってしか問題になっていないんだったら、やっぱりそれも一種の自家撞着でしょ。下手すると、もっとたちの悪い。

Y: そう言われると、そんな気もするな。けど、そもそも泉谷氏が今後どういう問題を立てるかってことも、僕らの頭の中での議論でしかないわけでしょ。

X: それを言ったら身も蓋もない。

Y: う～ん、そうだなあ。ちょっと不毛な議論になってしまったな。もう一度最初から整理してみよう。まず、泉谷氏は、二つの論文で、「理論と実証」という区別に基づいて、理論を理解していた。つ

まり、ここで「理論」は「実証」と対概念になっている。実証的、経験的な調査研究に対して、理論的、哲学的、思弁的な議論という捉え方⁸⁾。これは、「理論」と「実証」という言葉について一般的に共有されている理解とおおよそ共通するものだと思うし、僕も君も一致している。たぶん、泉谷氏も否定しないだろう。で、この分け方そのものを問いただすよりも、とりあえず理論的研究の充実を優先させるべきじゃないかというのが君の考えだった。

X: うん。だから、地理学評論の「固有名としての地名」論争の評価も、泉谷氏は積極的に表明するべきだと思う。

Y: で、それに対する僕の考えは、単に思弁的な議論だからって理由で安易に「固有名としての地名」論争に一言物申すよりも、むしろ「理論と実証」っていう分け方そのものを、泉谷氏なりのコンテクストの中で吟味しなきゃいけないんじゃないか、というものだった。で、そこで議論が堂々巡りになりかけた。

X: あのさ、今ここで議論している間にも、何気なく「理論」と「実証」って使い分けてるよね。そもそも私たちのこの分け方って何を基準にしているのかな。

Y: 一つは、なんていうかその、うーん、…。まず、僕らは、泉谷氏の書いたギデنز読解と論争の地図、この二本の論文は「理論」の方に含めてるよね。で、大平氏の地名に関する論文とそれに続く論争も。

X: もちろん、泉谷氏が紹介してた、海外の論争にかかわる論文もそうでしょ。ハンナ&ストロメイヤー、バーネット、セイヤーにカーリー。でもさ、そうすると、泉谷氏の論文で、理論的な論文なのかな。単なるレビューじゃないの？

Y: ん～、そうともいえる。というより、その通りだな。あれはやっぱり少しも理論的じゃない。さ

つき言ったのとはまた違った意味で。だからって、「実証」かということ、それも違和感ある。必ずしも君が言うような意味では理論的じゃないけど、どっちかということ、やっぱり「理論」のカテゴリーに入る気がする。

X：まあ、一応哲学とか社会理論の論争がテーマだしねえ。

Y：あと、いわゆる社会理論とは違うけど、数学的なモデルだけで組み立てられた議論なんかもある。中心地理論なんかも、文字通り「理論的」だよな。

X：「実証」の方はどうなのかなあ。たとえば、さっき私が言ったような金太郎飴的な人文地理の研究とかは、大半「実証」に括られるわけでしょ。

Y：少なくとも理論的という感じはしないよね。中には、前置きの部分で巧妙に社会理論や哲学の文献引っ張ってきて理論的意匠を凝らしてるのもあるけど。社会構築主義とか、記号論だとか、構造化理論だとか、現象学だとか。でも、たいがいの研究が、フィールドワークやなんかで得られたデータを使ったとたん、もともとの社会理論や哲学よりもつまらなくなってる気がする。つまらない／面白いの基準が何かって言われると困るんだけど、直感的になんか違うような気がする。

X：今いった、つまらない／面白いってというのは、多分、こういうことじゃないかな。フィールドワークとかのデータを扱うのがメインの研究で、社会理論や哲学の研究が引かれるときって、その理論や考え方と正面から向き合って、徹底的に格闘するために引用されてるわけじゃないことが多いじゃない。むしろ、どっちかということ、ばらばらのデータに筋道を与えて一種の物語りを作るために、そういう理論的研究や哲学的研究を引き合いに出したりする。だから、引き合いに出された理論や哲学の方から眺めてみると、大して議論が前進しているわけじゃないし、知的刺激にも欠けている。

Y：そういうことかもしれない。そもそも、理論的な関心にそってフィールドを選ぶよりも、まずフィールドワークやデータや分析技術の方が先にあって、そのあとから理論的な勉強するって人がほとんどでしょう、少なくとも日本の場合。もし、最初から理論的なことに関心があって、その問題を解決するためにフィールドワークで得たデータを使うっていうんだったら、また全く違った面白さがあると思う。でもそれは純粹にフィールドワークの面白さではないけどね。フィールドワークとか経験的な調査に、本当に知的な意味で価値があるなら、それは理論的な意匠なんか凝らすまでもなく充分面白いと思うんだよな。

X：もっと言っちゃえばさ、理論的な研究の蓄積なんかほとんどないくせに、理論的なことを前置きで書かなきゃ論文にならないかのような風潮さえあるわけでしょ。

Y：あるある。卒論とか修論書いている人が、よく、指導教官にもう少し理論的な枠組みを補強しろって言われた、なんてぼやいてるの聞くし。無理だよな、研究してる人も教える能力のある人もそんなに数いないのに。

X：まあ、ねえ。でもさ、話を元に戻すと、あなたの言うフィールドワークの面白さも、理論的な面白さとの対比の上で成り立つ面白さなわけでしょ。もちろん逆もまた然りだろうけど。理論的な意味で知的刺激のあるものがなければ、フィールドワークならではの面白さもありえないような気がする。だから、やっぱり理論的な研究の蓄積の方が…って、これじゃまた元の堂々巡りに戻っちゃうわね。

Y：ともかく僕らは二人とも「理論」と「実証」を何らかの基準で区別してるんだけど、少なくとも、全部の研究がそのどちらかに括られるわけではない。グレーゾーンも多い。典型的には、展望論文なんかは、完全にこの軸では分類できないし。

X: 結局、ここで言ってる「理論」も「実証」も、
理念的なカテゴリーだってことね。

Y: そうみたいだね。で、必ずしも面白い／つまら
ないという区別の仕方とも重ならない。もっとも、
この区別だって何を基準にしてるのか分からない
けど。

X: ほとんど直感。

Y: でも、面白い／つまらないの区別と必ずしも重
ならないってことさえ断っておけば、金太郎飴的
な研究が「実証」の方に分けられるっていうこと
は言えそう。

X: そうね。それがつまらないか面白いかはまた別
問題。ということは、面白かつまらないかって
こと以外に、金太郎飴的な研究を特徴づける要
素が何か他にないか考えればいいわけね。そして、
はじめに私たちが漠然と「理論」って括ってた研
究には、その特徴が欠けてる、と。

Y: …そう考えると、具体的な地名をもったフィー
ルドが出てくるかどうかというのが判断の基準
の一つになってるような気がするな。僕らが漠然
と「理論的」、「哲学的」な地理学の研究だと考
えていたものは、地名を持った特定の空間を考察の
対象としているわけではない。

X: それはある。で、漠然と「実証」って呼んでた
研究の方は、地名をもった特定の空間が研究の対
象になっている。そういえば、「地図のない地理
学」っていう言い方も、この辺と関わってるん
だろうね。「地図のない地理学」の研究にいい顔を
しない人文地理学者たちって多いけど、それって、
もしかすると、地図がないことよりも、地名が見
えないことへの当惑が強いんじゃないかな。

Y: そこまでいえるかどうか分からないけど、地名
へのこだわりは確かにあるだろうね。一般性と特
殊性の二項対立図式は、未だに議論的になって
いるみたいだし⁹⁾、その中で「一般／特殊」とか

「普遍／固有」っていう二項図式はずっと生き延
びてきた。でも、この図式は、地理学に関して言
えば、地名を固有名と捉えた上で、地名によって
言い表される何ものかが、あくまで「特殊」また
は「固有」の方に位置付けられることを暗黙の前
提としてきたわけだ。ここで大平氏の議論も絡ん
でくる¹⁰⁾。

X: 別の言い方をすれば、地理学で言われてきた「普
遍／固有」、あるいは「一般／特殊」は、「没地名
／地名」っていう問題に限定されてる。

Y: 固有性とか特殊性とは言っても、「太郎」とか「花
子」とか、「たま」とか「ポチ」とか、「僕」とか
「私」とかは眼中にない。

X: そうそう。あと、一般と特殊を分けたときの、「一
般」を「理論」と同一視するっていう傾向もある
よね。

Y: そうだね。だから、「理論／実証」という分け方
は、「没地名／地名」っていう分け方を介して、
「一般／特殊」の区別ともつながってるわけだ。

X: で、こういう条件のもとでだけ「一般／特殊」
について議論をすれば、「一般／特殊」とか「普遍
／固有」っていう問題の方が風よけになってくれ
るわけだから、当然、地名の固有名としての位置
づけは表に出ないし、問われることがない。だか
ら、「一般／特殊」っていう構図で議論を延々やっ
ていけば、地名が固有名であって、それが一般性
には回収されない性質を持っているってことを根
本的に疑わなくてすむ。

Y: 金太郎飴の話も絡んでくるね。地名が固有名で
ある限り、地名を伴う特定のフィールドを対象に
した研究は、みんな特殊な状況下の「個別的な事
例研究」だってことになる。でもここでいう個別
の事例っていうのはほぼ無数に存在しうるわけだ
から、枠組みは全く同じままにして、「個別の事
例」だけを取り換えれば、別の事例研究がいくら
でもできあがる。それを積み重ねて任意の地点で

最大公約数を求めさえすれば、「相対的に一般的な知見」が得られる。こうやって、大量生産の金太郎飴的な研究に存在意義が与えられるってわけだ。以前に学会で、一つの会場ほとんどが「何処何処における何々」ってタイトルの発表で占拠されていたことがあった。発表プログラム、なかなか壮観だったよ。

X: 研究題目といえば、副題に「何処何処を事例に」というパターンも多いよね。

Y: そうだね。タイトルのつけ方に使われるこの二つの言い回しって、象徴的だね。固有性を持った個別の事例と地名が不可分に結びついているわけだ。

X: 確かに。こういう表題の研究で学会の会場が一つ埋まっちゃうってことは、ベリーの地理行列¹¹⁾が、研究を進める上でのフォーマットとしていかに根強く残っているかっていうのを表してるよねえ。

Y: 地理行列の話は1960年代だったから、マルクス主義だ、人文主義だ、社会理論だ、カルチュラル・スタディーズだ、G. I. Scienceだ、ポストモダンだなんて言ったって、実はこの30年ほどで地理学のパラダイム¹²⁾の根本はほとんど何にも変わってないわけだ。少なくとも日本ではね。良い悪いは別にしてさ。

X: そこまで言っちゃうかなあ。

Y: でも待てよ、もっと突っ込めば、「一般」ってカテゴリーを、「特殊」ってカテゴリーと対立させて、前者を理論的で科学的なもののみなすっていうのは、もっと遡って、ハートショーン対シェファアの図式にまでたどり着くかもしれない¹³⁾。60年代どころの話じゃない。

X: そう考えると、少なくともほぼ半世紀変わってないわけだ。ソジャの『ポストモダン地理学』¹⁴⁾だって固有名としてのロスと切り離せないし、プ

レッドの本でもストックホルムは重要な地位にあった¹⁵⁾。だから、ワイトゲンシュタインとかデリダとかがベースにあって、地名に拘泥しない議論をしていたカーリーやハンナ・ストロメイヤーにしてみたら、あんたら一体どこが新しいねん？ ってことになるわけね。うんうん、やっとな泉谷氏の「論争の地図」論文が少し分かってきた。

Y: とにかく、「何処何処における何々」で会場が埋まるっていうのは、人類学的には面白いテーマだけど、笑ってすませられる話でもない。地理学者が本意にもそういう狭い枠の中でしか空間認識を語れなくなってしまってるのか、そうじゃなきゃ地理学者自身の空間認識そのものが凝り固まっているかのどちらかだからね。地理的な知って、もっと複雑で豊かなものだと思うんだけど、それに見合った言語表現の手段を地理学者が持ち合わせていないわけだ。

X: こう考えると、大平論文の潜在的なインパクトってかなり大きいかもしれないわね。地名と一般名との間に明確な線引きができない可能性があるとするれば、「何処何処における」という言い方は、それが「特殊」や「固有」に属していて「一般」には属しないっていう考え方を完全に保証するわけじゃなくなる。つまり、地理行列という大きな枠組みでの位置付けを失うことになるわね。

Y: でも、地名がたとえ単独性とは結びつかないとしても、それが特殊性を体現していて言語システムの周縁部に位置する存在だってことは、言えるんじゃないのかな。だとすれば、地名を伴って語られる何事かが一般性を帯びないってのは、妥当な考え方なんじゃないかな。

X: うーん…。も少し正確な説明がいるか。

Y: そうだね。まず、ハートショーン対シェファアにしても、ベリーの地理行列にしても、地名を伴った個々の場所が特殊なものとして認識されているわけだけど、教科書的に理解されている範囲で考えても、そこには、固有名論で必ずと言っていい

いほど問題にされるような「特殊性」と「単独性」の区別は出てこない。実際にそういったことが論点になっているかどうかは知らないけど、少なくとも日本の地理学ではそういった論点を教科書的なレベルではフォローしてないよね。

X: 「特殊性」と「単独性」とがもし区別されていなければ、「一般」に對置されるカテゴリーとしての「特殊」には、「特殊性」と「単独性」両方の属性がアド・ホックに与えられることになるわね。

Y: そう。つまり、ある時は「一般」へと回収されてしまうことを堅固に拒みながら、また他方では任意に積み上げていとも簡単に「一般」へと昇華される、ということが矛盾なく起こりうることになる。そして、地理学においては、地名で名指される存在者が、まさにそういった性格を持つものだったわけだ。だから、大平氏が中島氏とともに「地名については単独性の議論は全く成立し得ない」って言う時¹⁶⁾、これまで地名で名指されていたものに与えられていた性質の一つが、否定されたことになる。そして、その性質こそが、地理行列の中で、地名によって名指される存在者の特権的なものにしていた。

X: 地名が単独性とは縁がないとすれば、地名を伴って語られる事柄が地理行列の中での位置付けを失って、宙に浮くってこと?

Y: うん。だから、当たり前のように行われてきた数々の事例研究は、徹底的にその位置付けを問われることになる。

X: でもさ、それだけのことなら、単に「私」をめぐる単独性の問題を持ってきて、それが地名に關しては成立しないことを言えばすむわけでしょ。地名に關しては「私」という一人称でもって語るような主体がない、と。これだけ指摘すれば、地名で名指されるものに「一般」へと回収されえない「単独性」は宿らないってことは充分に言えるんじゃないかな。

Y: ああ、そうか。だとすると、大平氏の議論の意義はもっと別のところにあるってことになるな。

X: それにね、これだけじゃ、地名で名指されるものが地理行列の中で位置付けを失うことにはならないと思う。だって、「一般」と「特殊」の別は依然として生き残っているわけでしょ。「特殊」がいかに「一般」へと回収される回路を持っていたとしても、「特殊」なものの単一では「一般」ではありえないんだから、やっぱり地理行列は描けてしまうでしょ。

Y: ん〜。そうだなあ。

X: 大平氏の議論のポイントは、カテゴリー化っていう考え方のもとで、地名と一般名との連続性を示した点にあると思うのね。「単独性」が成り立たないことを指摘するだけなら、地名が「特殊」であって「一般」ではないという議論は温存される。ここで地名は、それ単独では「特殊」に過ぎないという理由で「一般」から厳然と区別される。けど、カテゴリー化という観点で地名が一般名と同じ機能を持っているということが明らかになれば、一般名と地名との間に、「一般」と「特殊」との間にあるような明白な線を引くことが出来なくなる。カテゴリー化という点では、地名と一般名は程度の差こそあれ、一般化の機能を担っていることになるわけだから。つまり、地名と一般名の境界は曖昧でグラデーションになっていて、「特殊」と「一般」を相互排他的に区別するのと同じようには区別できない。

Y: ああ、なるほど。地理行列が解体されるのはこの地点か。積み上げて任意の時点で最大公約数を求めれば一般的な知見に達するはずの、地名を伴ったいわゆる事例研究は、地名と一般名の関係を「特殊」と「一般」の關係に重ねることが実はそれほど自明の理ではないってことが明らかになったときはじめて、大きな枠組みの中での位置付けを完全に失うわけだ。

X: 話がつながったねえ。

Y: そのようだね。こうしてみると、ここまで僕たちが、「理論／実証」について議論してきたことは、実は地名の問題にもかかわっていたわけだ。「地名のない研究」と「地名のある研究」。こういう議論をしてる地理学者ってだれか他にいないのかな。

X: ポストモダン系の理論的研究に対して、空間分析の研究者から揶揄が飛んだったという話が、泉谷氏の「論争の地図」論文でもエピソード的に紹介されてたでしょ¹⁷⁾。たぶん、あの反応の背後にも、地名を固有名として捉えることを前提にした研究者陣営の、地名＝固有名そのものにあまりこだわらない議論に対する居心地の悪さみたいなのが潜んでたんじゃないかなあ。その居心地の悪さから、無意識的に、ポストモダン系の理論研究をポストモダンの流儀で茶化すっていう選択がなされた。

Y: 想像力たくましいねえ。論争の精神分析してるみたいだな。あまり当たっているとは思えないけど、そういう邪推も思考実験としては興味深いね。まあ、でも、そんなふうには地名の問題として捉えなおすと、さっきの僕たちの対立にも抜け道が見えてくる。つまり、「理論／実証」の分け方を相対化することを最優先課題にするか、「理論／実証」のうち「理論」の方を積み上げることを重視するかで二人の見解が割れていたんだけど、これは別に二者択一の問題じゃない。「地名のない地理学」の可能性を具体的に考えていけば、二つとも同時に解決されるんじゃないかな。地名を伴う空間を所与の対象とせず、なおかつ地理学の研究であるような文章を書くことができるだろうかってことを考えていけば、「理論」の方に区分されながら、同時に「理論」と「実証」、つまり「没地名」と「地名」の区分も相対化できるような視点が得られるんじゃないか。

X: 社会にかかわるほとんどあらゆる事柄が、人文地理学の対象になりえるんだけど、それが人文地理学であるためには、そこに地名が絡まなければいけないっていう暗黙のルールみたいなものがあるよね。ただ、人文地理学以外の社会科学だとか人

文科学とかとの交流の中で、いちいち地名を絡めてたら対処しきれないような問題も、人文地理学の中に流れ込んでくる。その時に、もし、人文地理学の内部で暗黙のルールが変わっていけば、つまり、地名を絡めなければいけないっていうリジッドな条件が緩和されて、もう少し複雑な事態にも対処できるようになれば、人文地理学っていうシステムは違った形で存続するだろうし、逆に対処できずにルールも変わらないままなら、システムは外部との関係のギャップを内部で処理しきれずに、瓦解していくかもしれない¹⁸⁾。そのこと自体は良くも悪くもないわけだけど。

Y: さっき僕たちが主張したそれぞれの方向は、人文地理学のルールでは対処しきれない、つまり、いちいち地名を絡めてたらやっつけられないような問題に対処するために、人文地理学っていうシステムが、内部の複雑性を増大させていこうとするプロセスそのものだったわけだ。

X: 実際、科学とその外部社会との関係は、20世紀通じて一貫して複雑になってきているわけでしょう。だから、私たちが、地名のある研究だけに安心して居座ってられないことにも、それなりの理由がある。今の私たちは、30年前、50年前と比べものにならないくらい、大量の情報に侵食されている。普段、携帯電話やインターネットに慣れている人なら、簡単に想像がつくよね。そして、その中で、地名を絡める論じ方では処理できないような問題も、かつてないほど大きくなってきているわけだ。古き良き地理学だけじゃ、残念ながら生き残っていけないかもしれない。これまで古き良き地理学が相手にしてこなかった事態にも対処していかないと、古き良き地理学そのものさえ守っていけないかもしれない。地名のない地理学を、そういう状況に対する危機感を伴った反応として理解することも、確かに可能ではあるわね。

Y: 古き良き地理学の殻に閉じこもるのは、ある意味では、原理主義的な姿勢だといえるかもしれない。ギデンズがコスモポリタニズムとの対比で理解していた意味での原理主義ね¹⁹⁾。そこからは反

動的な攻撃性しか生まれないとするなら、やっぱりそこに留まってるわけには行かない。もちろん、古き良き地理学を頑なに守りながらも、地理学とは全く異質な分野にも寛容であるってことも可能だったとは思っただけだね。どうも国内外問わず、地理学っていうのは、周囲の学問の価値判断に流されやすいというか、何というか…。まあ、現に周りに影響を受けてそれがもはや無視できない状況にあるんだから、今更「本来そうじゃないあり方も可能であった」、なんて言っても始まらない。だから、もし地名のない地理学の可能性を考えていくとしても、それが地名のある研究に予定調和的に還元されていくような研究ならあんまり意味がないわけだ。

X：でも、残念ながら、現状では日本の人文地理学で理論的なものと思われてるものって、ほとんど予定調和的だよね。さっきあなたが理論的な意匠を凝らすっていう言い方をしたけど、それだって、理論と向き合ってるようで向き合ってなくて、最後はフィールドワークや経験的調査のデータをすんなり受け入れてしまうわけでしょう。そういう意味で、とっても予定調和的。まあ、あえて具体的には挙げないけど。最初っから、理論とフィールドの幸福な結婚が約束されていて、めでたくゴールインしたら円満解決、大団円。

Y：現実には結婚してから後の方が大変なのにな。

X：…。泉谷氏も最初の選挙の論文²⁰⁾を見る限り、アグニューやギデンズの理論を、彼の後の言葉を使えば、そういうふうに「道具的」²¹⁾に捉えていた。まあ、アグニュー自身にもそういう傾向はあったわけだけど²²⁾、少なくともギデンズの理論は道具的に利用すべきものではなかった。彼は選挙の論文を書いた後にそのことに気がついたんだろうと思う。

Y：…具体的には挙げないって言ったくせに。まあいいや。ギデンズの場合は、特に彼が空間って言葉に重要な理論的価値を与えていたから、余計に人文地理学者に道具的に利用されやすかった面は

あるだろうね。もっとも、ギデンズはかなりの戦略家だから、わざわざ人文地理学者が乗っかってきそうな言葉を必要以上に強調したのかもしれない…と言ったら穿ちすぎかな。とにかく、空間でも場所でも、地名が入り込んでくる余地のある言葉には十分気をつけないといけない。

X：確かに、地名がないからといって、後から地名に取って代わるような言葉がきちんと用意されてしまっているのなら、何の意味もない。だから、もし空間とか場所とかそういう概念について語るのであれば、それは具体的な地名に置き換えて理解されるものであってはいけないうような気がする。地名付きの具体的な存在に置き換えて語れるのなら、最初からその地名で語ればいいわけでしょう。地名を伴ったものに置き換えられないからこそ、空間とか場所とかいう言葉を使う意義があると思う。

Y：それは面白い考え方だね。空間とか場所とかいう言葉が出てきたときに、地名が伴うようなレベルでの空間とか場所に置き換えて理解しようとする傾向って人文地理学には根強いと思う。日常的には、必ずしもそういう置き換えてって当たり前じゃないと思うんだけどね。むしろ、名前を特に持たない空間とか場所とかの方が、はるかにありふれてる。

X：でもさ、ふと思ったんだけどね、こうやって、地名のない地理学の可能性を追っていくと、どんどん思考実験的になっていくよね。まして、空間とか場所が地名と互換性を持たないような形で考えていこうとなると、話はますます抽象的になる。そうすると、現実離れた知的遊戯を批判できなくなってしまう可能性はないのかな。

Y：え？

X：だから、単にフィールド持ってないってことが美德になるような風潮が出てくる危険性はないのかな。人類学なんかには一部そういう傾向の弊害が出ているっていう声も聞いたことあるし。日本

の人文地理学でも、ポストモダン周辺のテキストが流行りだしたところに、そういう研究とかをフィールドワークの苦勞や困難から逃避した安楽椅子上の研究だ、みたいに非難する声もあったわけでしょう²³⁾。

Y: まあ、そういう声が出るのも分からなくはないね。フィールドワークは人文地理学のアイデンティティの基盤そのものだし。大きな学会でも、いまだにちゃんと巡検の日が用意してあるしな。地名によって固有性を保証された空間へと入っていくことがフィールドワークなら、地名に固執する人文地理学がフィールドワークにも固執するのは当然のことで、そこら辺が揺さぶられるようになってくると、当然アイデンティティ・クライシスに陥ることも考えられる。地図のない研究に顔をしかめるのは、日本だけに限ったことじゃないのは、ジル・ヴァレンタインやマイケル・ディアアが嫌がらせにあったということからも分かるとおりで²⁴⁾。もっとも、ヴァレンタインの方は、もう少し事情が複雑な気がするけど。

X: さっき原理主義が反動的な攻撃性をはらむって話してたけど、ディアアとヴァレンタインの件なんかその典型だよな。まあ、誰が正当な地理学を代表してるか、っていうのは、どうでもいい問題だと思うけど。もちろん、自分が代表していると思込んできた人たちにとっては、そりゃあ一大事かもしれないけどさ。それはともかくとして、地名のある研究に引きこもるのが望ましくないからって、無意味な知的ゲームが野放しになるのもどうかと思うんだけど。

Y: 現実離れた知的ゲームのことをいうのなら、研究題目に地名が入っていいよといまいと、およそどんな研究だって不毛な知的ゲームになりうると思う。何が真面目で何がおふざけかは、ここで問題にしているようなフィールドワークの話とは必ずしも接合しない。むしろ、フィールドワークで調べ物して、地名のついた空間について語ればそれで人文地理学っていう学問になるかのような安易な風潮の方に、僕は不真面目さを感じてし

まうなあ。フィールドワークやって地名を語ることで、知的ゲームだ、机上の空論だという非難を避けることはできるかもしれない。でも、そもそも地名を語ればなぜ現実的なことについて語ったことになるのか。それは誰も考えてない。さっきも言ったけどさ、地名が固有性を保証するとは限らないわけだし、僕らが日常的に生きてる空間は必ずしも固有の名前を持つとは限らないわけですよ。

X: もちろん、地名を使って語れば現実について語っているような気分になれて、空間とか場所とかについて語ると現実から少し遊離してるような気がするってこと自体、よく考えてみなきゃいけない問題ではあると思う。でも、そういう問題意識から地名のない地理学の可能性を探っていくとしても、それが不毛な知的逡巡に陥らないようにするにはどうすればいいかっていう問題の立て方はありなわけでしょう。仮想敵から何を言われるかっていうのと関係なしに、それは地名のない地理学にとっての課題になりうるんじゃないの。

Y: そりゃ、まあ、そうだ。誰に何を言われるかに関係なく、地名のない地理学はこの問題に取り組まなきゃならない。確かにその通りだな。難しいところだね。

X: そもそも知的二ヒリズムとか、認識論的懐疑論を、なんで避けなきゃいけないのかな。これを非難する人って、地名とかフィールドとか現実とかにこだわる人を中心に大勢いるわけだけど、そういう人たちの非難の大半で、認識論的懐疑論者をどう考えても説得できそうなものじゃないんだよねえ。「なぜ現実を見る必要があるのか」なんて考えてる人に、「現実を見なければならぬ」なんて言ったって、改心させられるわけじゃない。

Y: 認識論的懐疑論とか、さっき言った知的遊戯とかを避けなければいけないっていう認識が、そもそも問題の的を外しているんじゃないかな。

X: どういうこと？

Y: 僕は知的遊戯とか認識論的懐疑論は避けるものじゃなくて、突き抜けるべきものだと思ってる。考える営みの中で、認識論的懐疑論はまず避けて通れない問題だ。単に回避するだけでいいのなら、最初から考えなければいいんだけど、それは無理な相談。だから、少なくとも僕は、知的二ヒリズムの手前でとどまっている思考よりは、知的二ヒリズムまで到達した思考の方が、まだまだと思っている。でも、そのどちらにも満足しているわけではないよ。というのは、知的二ヒリズムまで達した思考だって、結局はそこで留まってるだけだからね。さっき雛型の話が出たけど、思考のプロセスがある時点で停止するとき、つまり、いろんな問題があるけどりあえずここでいったん考えるのを止めましようってなったとき、そういう雛型が生まれる。知的逡巡の末の二ヒリズムだってそういう雛型になりうるし、それは、泉谷氏の論文で紹介されてたハンナとストロメイヤーにしたってそうだった。バーネットは、セイヤーと違って、そこを的確に突いてきた。セイヤーの批判は、ややもすると知的二ヒリズムの手前からの非難にすりかわりやすいものだったのに対して、バーネットの非難はその先の地点からの批判だった。だから、ハンナとストロメイヤーはバーネットの批判を歓迎したわけだ。ようするに、僕が言いたいのは、なんていうか、その…。

X: でもね、話の途中で申し訳ないけどさ、知的二ヒリズムで留まってようとその先まで突き抜けようと、地名のある研究に依然こだわっている人たちにとって見ればどっちだって同じだと思うのね。結局、椅子に座って考えてるだけじゃないって。それならやっぱり知的ゲームじゃないかって。やっぱり現場とかフィールドとかからはどんどん離れていっちゃってる。

Y: でもさ、今君の言った現場とか、フィールドとかって、あくまで地名=固有名とセットになった現場でしかないわけでしょう？ もし、君が、いまここで議論している場以外のどこかをもって現場とか、フィールドとかいうのであれば、むしろそ

っちの方こそが現実から遊離してて観念的なんじゃないか。今ここで僕と君とが議論してる、この事態そのものの現実性はどうでもいいわけ？

X: そう言われると…。

Y: 僕が、知的二ヒリズムを突破するところまで考え抜かなきゃいけないって言うとき、僕は別に現場やフィールドから遊離しているとはぜんぜん思っていない。なんていうか、その、理論的な研究とか哲学的な研究っていうのは、それを語る人が学者として生きているこの世界全てがフィールドだと思ってる。もちろん、その世界はその人にとって現れる世界だから、その人自身もフィールドの一部になる。だから、フィールドをそういうものとして捉えるのなら、ナイーブに思考の場の外側に広がる風景だけをフィールドだなんて言ってもらえない。フィールドは研究室の外だけじゃなく、中にもあるってことだ。どっちの方がより真正なフィールドかなんてことは、本質的な問題じゃない。そこに人がいて考えて生きてる限り、そこはいつだって生の現場なわけでしょ。

X: そうは言っても、私が知ってる限り、日本の地理学では「フィールド」の概念が、もうべったり地図や地名と背中合わせになってる。ほとんどの地理学者って、地図や地名抜きでフィールドを想像することが出来ないんじゃないかな。まあ地理学者に限らないかもしれないけど。そういう人に「ここがフィールドだ」って言うってみても、やっぱり詭弁にしか聞こえないような気がする。私自身、たしかにここもフィールドだって半分は納得しながら、なんか釈然としないもん。ここがフィールドだったとして、だからなんなのさって。

Y: そうだなあ。たしかに、ここが現場だフィールドだって言うのは、開き直りのスローガンで終わってしまう危険性もある。僕自身、今、だからなんなのさと聞かれたらそれ以上答えられない。そう考えると、地名のない地理学の可能性を…なんて意気込んでみたけど、そういう研究の意義を積極的に持ち上げるのはなんだか空しいことのように

に思えてきた。結局、地名のない地理学の意義って何なんだろう。

X：なんかさ、それってもはや人文地理学じゃなくたっていいんじゃないの。社会学です、哲学です、じゃいけないわけ？

Y：う～ん。それでもいいような気がしてきた。地名のない地理学じゃなくて、単に地名のない研究。いや、研究じゃなくてもいいのかな。なんか、さっきからずっと積み木崩しやってるみたいだ。出来たと思ったとたん、がらがらと崩れて、また出来たと思ったらまた崩れて。

X：うーん。もしかしてそれが地名のない研究の意義じゃないのかな。

Y：何が？

X：だから、積み木崩し。普通、研究にはきちんとしたフォーマットやルールがあってさ、そのフォーマットやルールに則って、問題を見つけて、解決していく。そこでは一度組まれた積み木は崩したりしないでしょ。特に、「地名のある研究」っていう言い方で呼んでたような研究、まあ、最初は「実証」って括りかたしてた方よね、そういう研究では、フォーマットやルールがかなり堅固になってる。というよりも、地名を語るっていうこと自体、人文地理学にとってのリジッドなルールになってる。で、そういう研究ではごくごく限られた問題しか扱うことが出来なくなってる。でも、今ここでやってみるみたいに、今まで積み上げて来た積み木を崩すことで始めて明らかになる問題もたくさんあるじゃない。地名を語らない研究の意義は、地名を語るっていうフォーマットから自由だからこそ初めて明らかに出来るような問題を浮かび上がらせることにあるんじゃないのかな。

Y：なるほど。そうすると、ここがフィールドだっていう認識も、そういう問題の一つになりうるのかな。

X：うん、なると思う。スローガンじゃなくて問題という風に認識すれば、いろいろ先の展開が広がってくるでしょ。人文地理学者が今までフィールドにしてきた空間と、今ここでこうやって議論している場が、どちらも対等にフィールドでありうると思えば、人文地理学者が知識生産してる場だってフィールドワークの対象になりうる。ブルデューの『ホモ・アカデミクス』みたいな²⁵⁾。

Y：ブルーノ・ラトゥールがやっていたみたいな科学の人類学的研究もそうだね²⁶⁾。まあ、ブルデューやラトゥールの二番煎じってのも冴えない気もするけど。

X：ほらね、積み上げてきたものを崩してみたら、こんな感じで話題が広がっていくでしょ。理論と実証の話、査読の話、面白さの判断基準の話、地名と固有名の話、フィールドの話、科学社会学の話…。こうやって話題が広がって中でき、もしかすると伝統的な「地名のある研究」も全く違った意味や価値を持つことになるかもしれないわけでしょう。

Y：確かにそうだね。「地名のない研究」は、「地名のある研究」にとっての背景でありコンテクストなわけだから。背景が変わると見え方も変わる。

X：その、背景である「地名のない研究」が地理学である必要はないんだけど、もしそれを地理学と呼ぶことが出来るのであれば、地理学の世界がそれだけ豊かになるわけね。

Y：いや、むしろ、地理学である必要はないどころか、必然的に地理学なのかもしれない。地理学っていうのは、つねに位置付けだとか配置とかを問題にする考え方なわけでしょう。今ここで話してたことをさ、地名のある研究を科学社会学や固有名の話なんかみたいな「地名のない研究」との関係で位置付けようとする試みて捉え返せば、それもまた位置付けや配置の問題に関わっているわけだ。世界を理解するために何かを何かとの関係で位置付けて理解しようとする点では、これは地

図を描く営みと変わらない。確かに位置付けようとする対象は必ずしも地物じゃないけど、別に地物を描いた地図だけを地図として特権化しなくてもいいのかもしれない。

X: グンナー・オルションにも通じるのかな。彼は、「私の地理学は目に見えるものだけに限定されていない」ってはっきり断言してるよね²⁷⁾。オルションやカーリー²⁸⁾は、「思考の地図」とでも呼べそうなものにこだわっているようなふしがある。

Y: そうだね。「そのどこが地理学なんですか」って言われたときに、「あなたが地理学じゃないと思っているものも実は地理学なんですよ」って切り返せるような感性が必要なのかもしれない。社会学や哲学と呼んでいたものを、そのまま地理学として理解してしまうような態度というか、想像力というか。そういう感性がもっと市民権を得たときが来るとすれば、それが本当のパラダイム革命かも²⁹⁾。

X: ポスト地理行列のパラダイム。

Y: そういうことだね。ホントに革命まで行くかどうかは分からんけど。

X: さっきの面白い／つまらないの区別も、きっとそういう、世界を理解するための考え方としての豊かさ、奥の深さにかかわっているんじゃないかな。そこが多分、学問の価値をいちばん根っこの部分で支えているんだと思う。芸術とかと一緒に、学問ていうか知的探求はそれ自身で内在的価値を持っているわけでしょ³⁰⁾。まあ、職業学者やってる人間がこれを言うと決まって胡散臭くなるんだけど。

Y: そうそう、「自分で言うなよ」って。

X: まあ、別に地理学だけで深く理解する必要もないだろうけど、もし、今の地理学だけで理解できるよりもっと深く世界を理解できたときに、なおそれが地理学って呼べるような営みだったなら、

その探求はやっぱそれ自身で内在的価値持つ気はするね。

Y: 食べていけるかどうかはともかくね。

X: そうねえ。そういう文脈では、面白い／つまらないって軸よりも、役に立つ／役に立たないって軸の方が、重要性持つわね。

Y: お金取りやすいし。

X: お金の取りやすさ、役に立つか立たないか、有益か無益か、人文地理学でも全面的にそういう基準が優先されるのであれば、人文地理学はそういうコードで成り立っているシステムの下位システムになっていくだろうし、もしそこに回収されない剰余があるならば、そういうシステムの間になるというか、独自のコードを持ったシステムとして存続し続ける。

Y: たぶん、学っていうのも本来、そういう「役に立つ／役に立たない」っていう区別から構成されるシステムにとっては環境に区分されるような、全く別のシステムの一つなんだろうね³¹⁾。

X: でもさ、だいたい、学問の価値は役に立つとか立たないとかとは次元が違うんだ、みたいなこと言う人に限って、肝心の学問の方は非常に退屈だったりするんだよねえ。

Y: そうそう。そもそも学問的に退屈なんだってことに気づいてない。ただでさえ退屈なのに、その上実益がないときてる。もうお手上げだね。

X: まあ、一方では、世間一般がそういった学問的な面白さに対してめちゃくちゃ鈍感になってるってのも確かなんだけけどね。

Y: 書店に行けばマニュアル本の嵐だしねえ。考えるコストを省いてくれるようなものばかりが、圧倒的に受け入れられてる感じがする。

X: マニュアル本の書く規範でいうのは、基本的には世間に通用している規範なわけだから、そういった本を読んで勉強するっていうのは、原則的には、社会への内在を目指すことになる。神聖なもの、崇高なものじゃなく、世俗的で大衆的なものが志向される。学問、ていうか人文・社会科学自体が大衆的なものを目指そうとしていた時期もなかったわけではないだろうけど、学問の基本姿勢は内在よりも、超越だからね。あ～、でも超越的なものって、近頃じゃ確かに受けはよくないね～。

Y: 学者さん自ら、超越的なものを「大きな物語」とかと一緒にして拒絶するような風潮もあるしな。でもね、だからこそ、いっそう洗練されたやり方で超越することが何か価値を持つような気もするんだよね。もともと超越って態度は「今この自分」から何らかの距離を置くような態度のことでしょ。だとしたら、それは、特定の人たちが独占すべき態度じゃなくって、誰でも経験するような、人間の本性みたいなものだと思うんだよね³²⁾。

X: そういう人間の本性の一側面を徹底して洗練させるのが、学問、というよりは哲学っていう営みだったりするわけだ。

Y: そうだね。結果が役に立つか立たないか以前に、その徹底させるっていうこと自体に、ある種の価値が宿るわけだ。で、ときどきは、その産物が、偶然何かの役に立ったりすることもあるわけだけどね。広い意味での批判理論って、本来そういう種類のものだと思う。語る内容によって批判的だったり批判的じゃなかったりするんじゃないくて、プロセスそのものがオルタナティブでしかありえない。だから、批判の力があからさまに語られてしまったりすると、もしかすると時々学問が持っているはずの批判の力を切り詰めてしまうことになりかねない。

X: つまり批判理論は不可能である…と？

Y: そう、いや、もうやめとこう。また今日も調子

に乗って喋りすぎた。

X: いいじゃない、いまさら気にしなくていい。

Y: いや、やっぱりやめとく。どうせまた僕の喋ったこと逐一メモしてるんだろ。それともあれか、携帯越しに録音でもしてるんじゃないのか。だいたいいつもそうだ、いっつもいっつも僕だけが喋ってるわけじゃない、君だって…。

X: もしもし、よく聞こえない。電波つながり悪いみたい。もしもし…。

Y: …そうさ、君だって一緒になって、余計なことたくさん喋ってる、今日だってそうだ、なのに、いつもなぜか僕だけが喋ったみたいになってる、これだってそうだ、不公平だよ、君だけ絶対槍玉には上がらないようになってるんだ、どうせまた…。

X: もしもーし。聞こえないーい。…。まっ、いいか～。十分言質取ったし、とりあえず今回の調査はここまでで。

付記

本稿は、私にとってごく私的に問題となっていた論点を整理するためのモノログとして書かれたものに、多少の加筆修正を施したものである。登場人物の発言には、これまで出会った多くの人文地理学者の方々とのインフォーマルなやり取りが反映されている箇所もある。これまで私と議論して下さった全ての方々へ感謝いたします（もちろん、この点を除けば登場人物は実在の人物とは一切関係なく、登場人物の発言内容に関する一切の責任は、筆者一人が負うものであることをお断りしておきます）。

注

- 1) Olsson, G., 'Lines of power' (Barnes, T. J. and Duncan, J. S. eds., *Writing Worlds: discourse, texts & metaphor in the representation of landscape*, Routledge, 1992), p.95.
- 2) (1) 大平晃久「カテゴリー化の能力と地名」地理学評論

- 75, 2002, 121-138 頁, (2) 成瀬厚「場所名と記号体系—大平論文に対するコメント」地理学評論 76, 2003, 172-175 頁, (3) 中島弘二「記号の限界」地理学評論 76, 2003, 176-179 頁, (4) 大平晃久「信念・知識体系の一環としての地名—中島氏と成瀬氏の批判に就いて」地理学評論 76, 2003, 180-183 頁。
- 3) 泉谷洋平「人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論—英語圏における理論的論争をめぐって」空間・社会・地理思想 8, 2003, 2-22 頁。
- 4) 前掲 2) (4) (大平 2003), 183 頁。
- 5) 泉谷洋平「行為の自己言及性と時空—人文地理学者のアンソニー・ギデンズ理解をめぐって」空間・社会・地理思想 7, 2002, 2-18 頁。
- 6) 前掲 5) (泉谷 2002), 9-11 頁。
- 7) 馬場靖雄編『反=理論のアクチュアリティ』ナカニシヤ出版, 2001, i-iv 頁。
- 8) たとえば, 前掲 3) (泉谷 2003), 18 頁や, 前掲 5) (泉谷 2002), 11 頁を参照。なお, この区別自体は, 少なくとも人文地理学においては一般的にほぼ自明なものとして多用されている。
- 9) 谷内達「人文地理学研究における一般性と特殊性」1999 年度人文地理学会大会研究発表要旨, 1999, 10-13 頁。
- 10) 前掲 2) (1) (大平 2002), (4) (大平 2003)。
- 11) 地理行列とは, 行方向に自然現象から社会的現象に到るまで, 特定の地域を構成するさまざまな要素を, また列方向には様々なスケールの階層からなる空間的ユニットを配した行列のことであり, プライアン・ペリーが人文地理学という学問を一つの統一的なシステムとして理解するための枠組みとして提示したものである (ペリーの枠組みでは, これらに加えて時間を表す軸も含まれており, 3次元の行列となっている)。行方向は通常地名によって分節化されることが多いが, これは, 地名によって名指されることが空間的スケールの階層性の成立にとって重要な契機であることと, 大いに関係していると思われる。Berry, B. J. L., 'Approaches to regional analysis: a synthesis', *Annals of the Association of American Geographers*, 54, 1964, pp. 2-11.
- 12) ここでパラダイムと言うのは, 厳密には, 後にトマス・クーンが「専門母型 disciplinary matrix」と呼んだものである。詳しくは機会を改めて議論したい。
- 13) シェファアは 1954 年の論文で, カントからハートションに至る地理学の伝統において支配的であった「例外主義」的な傾向—地理学が一般的な法則定立にはなじまないと考え, 固有性や特殊性を重視する—を批判し, 空間に関する法則を追求する科学としての人文地理学の可能性を論じた。Schaefer, K. F., 'Exceptionalism in geography: a methodological examination', *Annals of the Association of American Geographers*, 43, 1954, pp. 226-249.
- 14) ソジャ, E. (加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳)『ポストモダン地理学—批判的社会理論における空間の位相』青土社, 2003。
- 15) Pred, A., *Lost words and lost worlds: modernity and the language of everyday life in late nineteenth-century Stockholm*, Cambridge University Press, 1990.
- 16) 前掲 2) (4) (大平 2003), 182 頁。
- 17) 前掲 3) (泉谷 2003), 20 頁。
- 18) ここでは, ニクラス・ルーマンの社会システム論 (特に大庭健による読解) を意識しつつシステムという言葉を用いている。大庭健「訳者解説 I」(ルーマン, N. 著, 大庭健・正村俊之訳『信賴—社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房, 1990) 201-223 頁。
- 19) ギデンズの定義では, 原理主義とは「包囲された伝統」であり, 「伝統的なやり方で—儀式的な真理に照らして—保護されてはいるけれども, グローバル化の進む世界ではその存在理由が問われるようになった伝統」のことである。ギデンズ, A. (佐和隆光訳)『暴走する世界—グローバル化は何をどう変えるのか』ダイヤモンド社, 2001, 102 頁。なお, 同書 93-95 頁も参照されたい。
- 20) 泉谷洋平「棄権率からみた国政選挙と地方選挙の関係—コンテクスチュアルな視点からの因果分析」人文地理 50, 1998, 507-521 頁。
- 21) 前掲 5) (泉谷 2002), 10 頁。
- 22) たとえば Agnew (1987) は, ギデンズの理論などを援用したフレームワークの整理に始まり, スコットランドやイタリアの事例研究へ移行する, という章構成になっている。Agnew, J. A., *Place and politics: the geographical mediation of state and society*, Allen & Unwin, 1987.
- 23) たとえば, 長谷川孝治「海外調査と私の地理学研究」神戸大学史学年報 15, 2000, 55-64 頁。
- 24) (1) Valentine, G., "'Sticks and stones may break my bones": personal geography of harassment', *Antipode*, 30, 1998, pp. 305-332, (2) Dear, M., 'The politics of geography: hate mail, rabid referees, and culture wars', *Political Geography*, 20, 2001, pp. 1-12.
- 25) ブルデュー, P. (石崎晴己・東松秀雄訳)『ホモ・アカデミクス』藤原書店, 1997。
- 26) ラトゥール, B. (川崎勝・高田紀代志訳)『科学が作られているとき—人類学的考察』産業図書, 1999。
- 27) 前掲 1) (Olsson 1992), p.95.
- 28) Curry, M. R., *The work in the world: geographical practice and the written word*, University of Minnesota Press, 1996.
- 29) 人文地理学において, クーンのパラダイム革命と類比的に捉えられることのもっとも多い学史的イベントは, いわゆる計量革命である。これは, 1960年代頃, 固有性を追究する「例外主義」的な伝統地理学から, 統計学や数理モデルを援用して科学的な一般理論の構築を追及す

る計量地理学へと転換するプロセスのことである。(1) ジョンストン, R. J. (立岡裕士訳) 『現代地理学の潮流 : 戦後の米・英人文地理学説史 (上)』 地人書房, 1997, (2) 野間三郎「地理学における伝統と革新」(西川治編『地理学概論』朝倉書店, 1996) 53-58 頁。ブライアン・ベリーも計量革命の旗手の一人であるが、注 11) で紹介した地理行列の議論は、計量革命後の新しい地理学と伝統的

な地誌学的研究とを統合しようという意図の元に考え出されたものである。

- 30) ネーゲル, Th. (永井均訳) 『コウモリであるとはどのようなことか』 勁草書房, 1989, ix-x 頁, 204-205 頁。
- 31) この前後における「システム」という言葉の理解に関しても、前掲 18) (大庭 1990) を参照されたい。
- 32) 前掲 30) (ネーゲル 1989), 17-39 頁, 306-332 頁。